



←ガイド会社のオフィスでHutへの行き方の説明を受ける



←出発前のパッキング、ほとんど食料です。ちょっと重いけどビールも忘れずに!



←遠くの山には雲の切れ間に青空も。荷物を背に道なき道を進む



←南〜東向きの斜面の雪は軽く、気持ち良かった



←暗くなるまで遊んでいたら湖にはきれいな夕焼けが映っていた



←Rex Simpson Hut でくつろぐふたり

↓このHutを建てた人たちは、きっとこの景色を見るためにこの場所にしたんだろう



Hut to

Hut at

New Zealand

純白と紺碧の狭間を往く



↑良い雪が降ってニコニコの僕



↑幼少の頃からアウトドアスポーツに親しんでいるマーカス。頼りになる優しい男

文=藤川 健
Text by Ken FUJIKAWA

写真=マーカス・ノード、藤川 健
Photo by Marcus Nord, Ken FUJIKAWA

スキー場は数えるほどしかないニュージーランドだが、2000年クラスの山は島全体に広がり、とくに南島には多くの山脈(RANGE)や氷河が存在する。

低地に雪が積もらないニュージーランドでは例年1200m付近がスノーラインとなり、それより上部は白く、下部は茶色といった景色が広がる。そしてそれらの山々には無数の山小屋(ハット)が点在し、人々に利用されている。冬期間は一部閉鎖されることもあるが、利用できる場所も多い。当然、そのようなハットは絶好のバックカントリースキーのベースとなる。

僕がニュージーランドへ通うようになって以来の古い友人、マーカス・ノードとシーズン前からツアーの計画を練っていた。行き先はニュージーランドの東側の山域。幸運にも今年は約10年ぶりと言われた当たり年、雪はよく降った。そして降りすぎた。僕たちが出発を予定していた直前に前線を伴った勢力の強い低気圧がニュージーランドを通過して、至るところに降雪をもたらしていた。そして低気圧の通過後、高気圧に覆われたなかでの絶好のタイミングになる、はずだった。

しかし強力すぎた低気圧はニュージーランド上を通過後、動きを止めて発達。通過した前線は、ぐるりとひとまわりしてふたたびニュージーランドの東側を直撃。僕たちが予定していた山域では雪崩が連続し計画変更を余儀なくされた。悪天候の場合に備えて考えていた他のプランも、この大荒れの中ではどうにもならず、根本的に行き先を変更するしかなくなってしまった。

西も東も荒れ模様。天候図の中、内陸に比較的天候回復の兆しがあ

った。地図と天気図を見比べて行き先は決まった。

DAY 1

僕たちはテカポ湖(Lake Tekapo)に向かって車を走らせた。その湖に面したツー・サム・レンジ(Two Thumb Range)は、2000m以上の山が連なっているエリアでいくつかのハットもある。その地形は複雑で変化に富んでおり、自分のレベルに合わせたルートを選択しやすいところでもある。

ニュージーランドのハットはほとんどが無人だが、その所有者は国の機関であるDOCや地方の山岳会などに分かれているので事前に許可を得ておく必要がある。僕たちが利用したのはテカポのガイド会社



↑さ〜て、どこを滑ろうか？ 選択肢がありすぎて迷ってしまう



↑小川のほとりで優雅なランチタイム

↓人里はなれた、何も山の中にポツリとたたずむCold River Hut



トを選んで進んだ。まずは昨日登った丘の上まで行き裏側に滑り込む。そこから2時間かけてもうひとつ尾根を登ると大きなボウル状の地形になっていて、全体的に急な斜面が広がっていた。この尾根を滑り降りた小川のほとりでお昼を食べている頃には気温もグングン上がってきて、次に登る尾根の北西面では小規模な点発生雪崩がそこら中で発生し始めている。次はこの尾根を越えた反対側の斜面を滑りたいのだが、あまり良い状況ではない。40度前後の急斜面が続く尾根の比較的斜度の緩いところを慎重に選びながら登っていくうちに、暑さで汗が噴き出してくるくらいに気温は上がってきた。そして標高差500mほどの尾根上にもうすぐたどり着くというところで、先行していたマー

カスが叫び声を上げた。周りに変化はないが何かがあったらしく、じつと動かずに止まっている。どうやら雪の沈下する「ボフツ」という音とともに足元に震動に感じたらしく、それも続けて2回。少し離れた僕の位置では感じなかったが、まじがいに雪崩の前兆だろう。照り付ける直射日光と急激な気温の上昇が、僕たちの足元の雪を急速に不安定に変化させているようだ。尾根上までのわずかな距離を、あまり刺激を与えないよう慎重に、かつ足早に登りきった。セーフポイントまで移動してからひと休みしてホットと胸をなで下ろす。そして登りきった尾根の反対側には陽のあたっていない南東面の斜面が待っている。雪質は登ってきた斜面とまったく違い、軽くスプレーの上がるドライパウダー

純白と紺碧の狭間を往く……

の斜面。怖い思いをしながらも登ってきたかいたがった。

今回のツアーで一番の斜面を滑り三三三で、今夜泊まるゴールドリバー・ハット (Gold River Hut) へ向かった。周りが特徴的のぼつりとした地形に囲まれているので迷うことなくすぐに見つかり、遠くから見るとボツンとやけに小さくみえるハット。近づいてみるとやっぱり小さく、まるで物置小屋だ。そういえばガイド会社の人もこのハットはもう古くなって取り壊す予定だからお金はいらないと言っていた。

しばらく歩き、積雪が増えてきた所でトレッキングシューズからテレマイクブーツに履き替え、シールで登り出す。めざすハットは下からは見えない。自分の進んでいる方向を信じて進み、4時間弱で標高1280mのレックスシン普森・ハット (Rex Simpson Hut) へ到着。今年は雪が多かったのか下からシルを使って登ることができた。荷物を置いてひと休みしてからハットのすぐ上の斜面を滑りに出かけた。明日の斜面をチェックしておくために見晴らしの良いところまで登ってみると、地図を見て予想していた通りの、どこまでも続く真白い山の世界が広がっていた。



→青い空、白い雪、黄金色に輝く太陽に照らされて、テレマークターンを繰り返す



↑ひとつの尾根を滑ると、その先にもまた尾根がある。移動を繰り返して滑りまくる

Hut to Hut at New Zealand

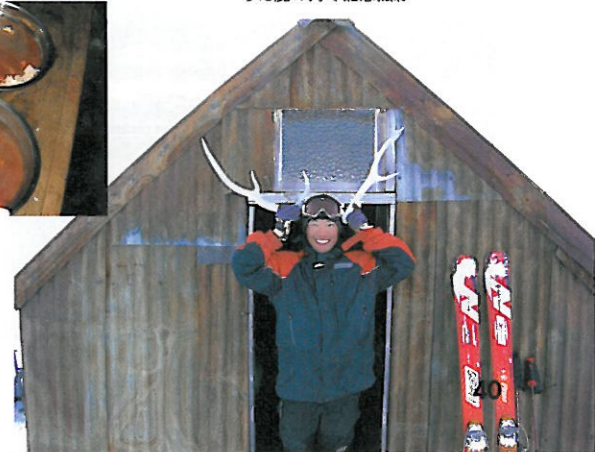


←Cold River Hut。外見はぼった小屋だけど中はこんな感じ。小さいながらも機能的



↓なぜか小屋の中にあつた鹿の角で記念撮影

↑夕食のレトルトカレー。日本へ輸出用にNZで製造されたもので美味かった



ハットに戻った頃にはすっかり暗くなり、さっそく夕食の準備に取り掛かる。ここはガイド会社所有のプライベートハットだけあり、かなりきれいで設備も整っている。暖炉やベッドはもちろん、ガスコンロやソーラーパワーの電灯まであるのは快適すぎるくらいだ。

DAY2

翌日は朝から快晴。トレッキングシューズなどの先必要のないものをハットにデポして出発。雪はラッセルが必要なくらいにベースは締まっているが、上に載っている雪は軽い。ツアーをするには最適なコンディションだ。基本的に日当たりの良い北西面を登り、雪質の良い南東面を滑りながら尾根を越えていくルー

SKI IN CANADA AT NELSON RANGE

VAGRANT SKI LIFE

写真=小路口 稔
Minoru Syojiguchi

文=稲垣勝範
Masai INAGAKI

至福を追い求めた俺たちの旅

スキーが好きだというただそれだけで、俺たちは互いに磁石のように引きつけ合い、ともに旅する仲間となった。カナダへの自由気ままなスキートリップ。最高のときがくる日を祈り、ひと月におよぶ放浪生活は始まった。

だ。しかしそんなハットも慣れてしまふと意外と心地よい。きれいで設備の整っているハットもいいけど、わざわざ人里離れた山奥まできているのだから、こんなボロボロのハットで思いつきバックカントリーに浸るのも良いかもしれない。欲を言えば、屋根に開いている穴がもう少し大きければ、きれいな星空が見えるのだけど……。

DAY 3

日の出前に目覚め、薄明るいハットの中を見渡すとやっぱりボロい。そして詰まっていた煙突のおかげで、小屋の中も僕たちの顔も煤で黒くなっていたけど、不思議と気分は爽快だった。簡単な食事の後、昨日こへ来る途中に見えた良さそうな斜面を滑りに出かけた。必

要最低限の荷物で朝一のシュプールを描くために。新雪は積もっていないが、夜中に冷え込んだので雪面の結晶が大きく成長している。陽が高くなればすぐに壊れてしまふ、このきれいで大きな結晶。シルを付けたスキーを滑らせると、サクサクツと心地良い音を立てて崩れる感触は、まるでフワフワの絨毯の上を歩いているように気持ちいい。やがて太陽が遠くの尾根から顔を出すと、雪の結晶たちは朝の光を反射してキラキラと輝きはじめる。こんな景色の中を歩いているときは、登りさえも楽しいものだ。

お目当てる斜面を滑ってからハットに戻り、荷物をまとめて出発。昨日とは違うルートを通って、一日目に泊まったレックスシン普森・ハットへ向かう。今度は西に向かう移動。昨日の一件もあるのでなるべく真西ではなく、南向きの楽しそうな斜面を探しながら登行と滑走を繰り返していく。お昼過ぎにはハットにデポした荷物を回収し、食料のぶんだけ軽くなったザックを背負って、なるべく雪が下まで続いているような沢を滑り降りた。高度が下がり、スノーラインが近づくと、雪はパウダーからクラスト湿雪へと変わっていく。雪の下から顔を出すタソック(ニュージーランド特有の硬い草で羊も食べない)が増えてくると、だんだん滑りにくくなってくる。雪が途切れたところからは靴を履き替えて山を下る。さすがにスキーとテレマイクブーツの重さが加わるとザックは肩に食い込むくらいに重くなるが、充分楽しんだ後では足取りも

軽い。まだ陽の高いうちに車に着いたので、滑ってきた山を眺めながら、のんびりふたりで飲んだビールが美味かった。尾根に登りきったとき、突然視界が開け、初めて見る斜面が広がる。そこをどのようなラインで滑るのか、いろいろなイメージが頭の中で一気に広がっていく。そして、すべてはその場の判断で、自分の滑る一本のラインを決める。滑り出した斜面がちゃんと下まで続いているのか? そんなことは滑ってみなければわからない。だから滑り出すときはいつもドキドキする。そしてそれが楽しい。そんなことを繰り返しながら山の中でひとときを過ごす。それが、Two Thumb RangeでのHut to Hutだった。

Hut to
Hut at
New Zealand



山にはほとんど木がないNZではこんなバーンがそこら中にある



Lake Tekapo に向かって滑るマーカス。初日はあの湖のほとりから登ってきた



湖面に映る山々には、まだ僕の知らないHutがたくさんある



車に戻って、まず乾杯!



Two Thumb Rangeをバックに記念撮影。後に見えるのはTwo Thumb Rangeのほんの一部。奥は果てしなく広い